次の文章を読んで、設問に答えなさい。

日本において公共性を論じるとき、常に短いスローガンで表現されてきた。それは公共性が上からの抑圧的なメッセージであったことを物語っている。スローガンというのは、集団のモットーをわかりやすく表現したもので、それゆえに運動を喚起する効果がある。公共哲学が皆の哲学である限り、そこに注意を向けるには、スローガンは有効なものかもしれない。戦意高揚のためのスローガンや、革命のためのスローガンを見れば明らかだろう。

公共哲学の議論の変遷を、スローガンという切り口から分析するとどうなるか考察してみたい。まず従来の公共性の議論を象徴するスローガンである。これはなんといっても「滅私奉公」だろう。

この言葉は、戦前から高度経済成長期にかけて長きにわたって唱えられてきた。必ずしも公共哲学のスローガンとしてこの言葉が掲げられてきたわけではないが、新しい公共哲学を論じる際、①あたかもそれが従来の公共哲学を象徴するものであるかのようにいわれるのである。

なぜなら、滅私奉公とは、個人を犠牲にして社会を栄えさせることを意味するからである。公共哲学とは、「私」がいかにして社会にかかわるべきかを本質にさかのぼって考える学問である。したがってこの場合、「私」を犠牲にして社会にかかわるということになる。江戸時代の封建社会や戦前の日本はまさにそうだったわけだが、戦後の高度経済成長期にもそういう風潮があった。過労死などという異常事態が常態化していたのは、その証左であろう。

その後、「公」の行き詰まりによって、現代社会においては反対に「滅公奉私」がスローガンになっているかのようである。「公」などどうでもよくて、「私」こそが大事だという真逆の発想だ。社会などお構いなしに、自分を優先する人たちが増えているということでもある。これはもはや公共哲学ではないので、スローガンとして成立しているわけではない。換言するならば、公共哲学が行き詰まっているわけである。

そうした状態を危惧して、アカデミズムが議論をはじめ、新たなスローガンを掲げるに至った。それが 2000 年代初頭の公共哲学のスローガン、「活私開公」である。「私」を活かして公つまり社会を開くという意味になる。

このスローガンは秀逸で、なかなか批判するのは難しい。というのも、自分も社会も両方共にメリットがあるなら、こんなに素晴らしいことはないからだ。そこで、公共哲学の議論も完成を見たかのように思ってしまったのだろう。

ところが、②個人的にはこのスローガンも乗り越える必要があると思っている。そもそも「私」を活かしてというとき、どうしても人は「私」を優先してしまう傾向にある。だから社会がよくなるかどうかはわからないのだ。それはあくまで結果論となる。財を成した人がよくこのようなことをいうのを耳にする。自分が楽しむことが一番大事だと。そういう人にとっては、社会がよくなるかどうかは、ゲームの結果にすぎないのだ。実際、こうした言説は、成功者や個人主義を正当化しようとする立場からの言い訳として出てくることが多い。

そのような富める者のおこぼれをトリクルダウンというのだが、それはやはりどこまでいってもおこぼれなのだ。運がよければおこぼれにあずかれるが、そうでない場合は指をくわえて羨望の目で見つめているしかない。公共性をそんなみじめな姿に貶(おとし)めてしまってはいけない。

たしかに働き方として、自分を大事にすることは大切である。決して犠牲にしてはいけない。しかし、社会を担う一人の人間としては、少し視点が違ってくるように思うのである。社会は会社とも自分の人生とも異なる。それは次世代をも含む全人類の存在にとって基礎となるものである。とするならば、それについて考えるのは大前提になってくるように思うのである。

私が公共性主義を唱え、社会をよくするために行動しようと呼びかけるのは、そうした理由からである。自分と社会の両方にプラスになるようにしつつ、かつ社会がよくなることを大前提にする思想。公共性主義にはそうした側面がある。これをスローガンとして表現するならば、「開公活私」あるいは「善公幸私」となるだろうか。

つまり、社会をよくすることを前提に、自分を活かすということである。あるいは、社会をよくすることで、個人を幸福にするということである。この場合、個人の活動も社会のプラスになるようにという目的があるので、個人の自由の追求は必ず社会のプラスになり、ひいてはそれが個人のプラスになる。たとえば、いくら災害ボランティアに従事していても、自分本位で参加すると、逆に迷惑をかける結果になることもあり得る。それは自分を優先してしまっているからなのである。

ボランティアの目的は、あくまで利他的なものである。ただ、そのロジックが、利他のみで構築されてはいけないということだ。つまりはウインウインなのだが、その場合も決して自分が主のウインであってはいけない。従来のウインウインはどうしてもそういう嫌いがあった。公共性主義はそんな風潮に風穴を開けるものだといってよい。

（小川仁志『公共性主義とは何か　〈である〉哲学から〈する〉哲学へ』教育評論社、2019年。なお、原文の一部を変更している。）

【設問１】

下線部①について、なぜ「滅私奉公」は従来の公共哲学を象徴するスローガンのようにいわれるのか。その理由を本文中の表現を用いて説明しなさい。（200 字以内）

【設問２】

下線部②について、なぜ筆者はそのように思うのか。その理由を本文中の表現を用いて説明しなさい。（200 字以内）

【設問３】

筆者の考える公共性主義の意義について説明し、その上で「自分を活かす」とはどうあるべきかという点についてあなたの考えを述べなさい。（800 字以内）